K. ガウルホーファーにみる「教材 体系」の史的考察

稲垣正浩 (奈良教育大学教育学部)

(昭和57年7月19日受付)

A historical study on the Gaulhofer's system of subject matters
in physical education

Masahiro Inagaki¹

The purpose of this paper is to analyze the Gaulhofer's system of subject matters in physical education (System des Schulturnens) from the historical standpoint of physical education. In order to investigate the characteristics of his system, the ideas of physical education reform movement (Turnerneuerungsbewegung) and the trends of the studies on physical education from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century are analyzed, and then the relationships between these factors and his system are discussed.

The main findings are as follows. A lot of the historical heritages of subject matters in physical education were succeeded by his system. Especially, 1) hiking (Wandern) developed in youth movement (Jugendbewegung) was evaluated as a valuable material in performance exercises (Leistungsübungen) and adopted as a group of subject matters in his system, 2) various sports, which had occupied the great part of performance exercises, were taken over from sports movement (Sportsbewegung) and play movement (Spielbewegung) and were placed as the central part of the system, 3) corrective exercises (Ausgleichsübungen) developed in north gymnastics movement (Nordische Gymnastikbewegung) were improved and placed in the system, 4) from new gymnastics movement (Neue Gymnastikbewegung), dance and dancing play were succeeded as art movements (Bewegungskünste) and 5) apparatus gymnastics (Gerätturnen) developed in German turn movement (Deutsche Turnbewegung) were also succeeded as one of art movements.

The originality of Gaulhofer's system was found in the following three aspects. 1) The physical movements were thoroughly considered from the viewpoint of biological anthropology. 2) the concept of functional physical movement was defined and the idea of the science of functional physical movement (Funktionelle Bewegungslehre) was brought into the classification of physical movements and finally, 3) in classifying the physical movement materials, both the viewpoint of biological anthropology and that of the science of functional physical movement were harmoniously integrated.

(Masahiro Inagaki, "A historical study on the Gaulhofer's system of subject matters in physical education", *Jap J. Phys. Educ.*, 27—3: 173—85, December, 1982)

1 Nara University of Education, Faculty of Education, Takabatake-cho, Nara (630)

研究目的

K. ガウルホーファー (Karl Gaulhofer 1885—1941)^{27), 28), 29)} の教材体系に関する論文は、「学校体育の教材体系」(System des Schulturnens, 1927)¹⁵⁾ と「学校体育の運動学および教材体系学」(Übungslehre und Systemkunde des Schulturnens, 1966)¹⁶⁾ の2編が代表的なものとしてよく知られている^{注1)}。しかし、後者の論文は未完成に終っており、その全貌を知り得ないことは残念であるが、そのなかに含まれている「比較教材体系学」(Vergleichende Systemkunde)¹⁶⁾ をはじめとする一連の論文はこんにちのわれわれに示唆するところ少なしとしない。

ところで、このK. ガウルホーファーの教材体系はいわゆる「自然体育」(Natürliches Turnen)を支える重要な構成要素の1つとして1920年代の「オーストリア体育改革」(Die österreichische Turnerneuerung)を推進していく上できわめて重要な役割をはたしたことは、ここで改ためて断わるまでもないであろう²⁹⁾。ここでは、K. ガウルホーファーの教材体系が、第1次世界大戦前まで学校体育の主流をなしていたA. シュピース(Adolf Spieß 1810—1858)の教材体系^{50), 51), 52), 53)}にとって代り、いわゆる近代体育から現代体育への転換をはたす重要な役割を演じたと考えられており、こんにちの教材体系論議にきわめて大きな影響を及ぼしている^{6), 7), 30), 31), 32), 33)}、ということを確認しておけばそれで十分であろう。

このような歴史的意義を持つK. ガウルホーファーの教材体系が、じつはいかなる歴史・社会的背景から誕生してきたのか、という問題となると詳細については不明な点が多い。少なくともこのような問題関心に正面から取り組んだ研究はまだ生まれていないのが実情である。唯、このような問題関心に比較的近い先行研究としてH. グロルの研究を指摘しておく必要がある。H. グロル²⁵⁾は、主としてグーツムーツ以後の教材体系を祖上にのせ、近代における運動教材の発展史的視点から詳細な分析・考察を展開している。しかし、残念ながらかれの分析・考察は第1次世界大戦前までで終っており、K. ガウルホーファーの

教材体系には触れていない。同じH. グロルの別の著書^{6), 7)}では、K. ガウルホーファーの教材体系を取り上げ一定の分析・批判を加えてはいるが、それはあくまでも現在の視座から過去をふり返っての分析・批判であって、K. ガウルホーファーの教材体系が生み出される歴史・社会的背景に焦点を当てたものではない。

そこで、本研究では、K. ガウルホーファーの教材体系が、いかなる歴史的な遺産を継承・発展させ、かつ同時代の研究動向に啓発されながら、さらにかれの独創性をどのように盛り込んで形成されてきたのか、という点に焦点を当てることとする。つまり、これまで未着手のままにされていたK. ガウルホーファーの教材体系に対し、具体的な個々の運動教材の歴史的背景を問い返ししながら、かれの教材体系の独自性を明らかにすることによって、この領域に新しい研究成果を加えようとするものである。

K. ガウルホーファーの教材体系の概略について

論議に先立ち、まず、K. ガウルホーファーの教材体系の概略を明らかにしておく必要がある。幸いにも、K. ガウルホーファー自身の手によってまとめられた教材体系の一覧表があるので、ここではそれを論議の対象として引用しておくことにしよう¹⁵⁾。

<K. ガウルホーファーの教材体系>

- 1 補償運動Ausgleichsübungen (柔軟性, 弛緩, 筋力の補償) 体格の欠陥を取り除く, あるいは改善することを目指す。

- A. 下肢(腰椎を含む)の欠陥にたいする補償運動
- B. 脊柱(胴・頸)の欠陥にたいする補償運動
- C. 上肢(肩関節を含む)の欠陥にたいする補償運動

- 2 形成運動 Formende Übungen

個人の最善の姿勢形態と運動形態の獲得を目指す。

- A. 運動形成運動 (Bewegungsformende Übungen)

- 1 日常運動

呼吸する，歩く，おじぎする，身をかかめる，席につく，立ちあがる，向きをかえる，はねる，持ちあげる，手をのばす，など。

2 作業運動

走る，跳ぶ，乗る，よじのぼる，はいあがる，ぶらさがる，揺る，振動する，浮かぶ，滑る，引く，押す，持ちあげる，運ぶ，投げる，捕える，こじ動かす，など。

B 姿勢形成運動Haltungsformende Übungen

1 姿勢構築の運動（日常姿勢）

足関節，膝関節，腰関節，脊柱（腰，胸かく，頸，頭）

2 構え姿勢の運動（作業姿勢）

膝まづく，しゃがむ，片膝立ち，横たわる，ひじ立て伏臥，懸垂，ぶらさがり立ち，腕支持，経済上の労働や体育学習のさいにあらわれるその他の作業姿勢やはじめり姿勢（スタート姿勢，フェンシング姿勢，あくら，穴掘り姿勢，など）

3 達成運動 Leistungs Übungen

個人の最高の達成能力を獲得することを目指す。

A ヴァンデルン

- 1 徒歩ヴァンデルン
- 2 河川ヴァンデルン
- 3 スキー・ヴァンデルン
- 4 スケート・ヴァンデルン
- 5 キャンピング

B 球技^{註2)}

- 1 芝生の上で行なう球技
- 2 水上で行なう球技
- 3 氷上で行なう球技

C 防衛運動

- 1 レスリング
- 2 ボクシング
- 3 フェンシング
- 4 射撃

D 冬季の運動

- 1 スキー
長距離走，スラローム，ジャンプ
- 2 スケート

短距離走，長距離走，障害物走

E 水泳

- 1 競泳種目（平泳ぎ，背泳ぎ，横泳ぎ，クロールなど——それぞれスピードと持久力を）

2 潜水

3 とび込み

スタートとび込み，潜水とび込み，幅とび込み，高とび込み，障害物とび込み

4 救助法

F 基本運動

1 走る

クロスカントリー走，林間走，障害物走，短距離走，長距離走

2 跳ぶ

徒手跳躍（高跳び，幅跳び，跳びおり），懸垂跳び，揺り跳び，棒跳び，支持跳び

3 よじのぼる

狭義のよじのぼり，はいあがり，綱のぼり

4 ゆする

5 持ちあげる，運ぶ

6 投げる，押す，打つ

4 巧技 Bewegungskünste

運動衝動を美しさと巧技に充ちた運動遊戯に導くことを目指す。

A 軽業的巧技

1 徒手の巧技

前転，飛び板飛び込み

2 用具を用いる巧技

投・捕（曲投げ・曲受け），曲振り（棍棒振り），なわとび，竹馬歩き

3 器具の上での巧技

鉄棒，平行棒，鞍馬，つり輪，跳馬，遊戯台，遊動円木

B ダンス的巧技

1 ダンス的運動遊戯

肉体の躍動，歩・走・跳の巧技，滑走技術（フィギュア・スケート）

2 ダンス

輪舞（子どもの輪舞，フォーク・ダンス，芸術輪舞），氷上ダンスを含む個人ダ

ンスと集団ダンス

以上が、K. ガウルホーファーの教材体系の一覧表であるが、これと A. シュピースの運動分類^{50), 51), 52), 53)}との相違^{16), 25)}について多くを語る必要はないであろう。ここでは、このようなまったく異なる教材体系の発想がいかにして可能であったのか (K. ガウルホーファーによれば 180 度の発想の転換)²³⁾、その歴史的背景の考察を進めることにしよう。

K. ガウルホーファーの教材体系成立の歴史的背景

1 教材体系論の発展仮説

A. ボキータイティスは、近代体育の教材体系論の発展段階を分析した上で、つぎの三段階説を提示している⁷⁾。すなわち、「実践のための実践からの教材体系論」(グーツムーツ)、「実践のための理論からの教材体系論」(シュピース)、「理論のための実践からの教材体系論」(ガウルホーファー)である。これに対して H. グロル⁷⁾は、K. ガウルホーファーの発想は「理論的・学問的に深められた実践のための実践からの体系論」と言うべきだと反論している。

K. ガウルホーファーの教材体系論をどのように把握すべきか、という議論はひとまずおいても、A. ボキータイティスの示したシュピースの「実践のための理論からの教材体系」という表現はまことに正鵠を射ているものと言うべきであろう。つまり、A. シュピースの運動分類は理論：関節の可動性の原理、あるいは解剖学のなかに人間の身体運動を分解して再構成したものであるからである²³⁾。これに対し、K. ガウルホーファーの教材体系論はまったくその趣きを異にしている。その違いはいったいどこから来るのであろうか。

一般に、これまでに展開された教材体系論を支えている理論的根拠を整理してみると、つぎの6点に整理することができるであろう。1. 運動そのもの(運動現象・形態、身体部位など)の特徴にもとづく分類・体系化²³⁾、2. 運動の意義にもとづく分類・体系化(このなかにはさらに生理学、心理学、社会学などによる運動の意義づけの仕方に

よって細分化していく)。3. 教師の教育意図による身体運動の分類・体系化²⁴⁾、4. 運動する者(児童・生徒)の運動欲求にもとづく分類・体系化²⁵⁾、5. 人間の身体運動の基本形態にもとづく分類・体系化²⁶⁾、6. 運動形態学にもとづく分類・体系化²⁷⁾、である²⁸⁾。当然のことながら、実際の教材体系論はこれらの理論的根拠をいくつか組み合せて構築されるのが普通であるが、その比重の置きどころを整理していくと、現在のところでは上の6点のいずれかに該当するとみてよいであろう。以上の教材体系論のひろがりと考えてみると、A. シュピースの教材体系論は1. のなかに含まれ、K. ガウルホーファーの教材体系論は3. に相当することになる。このような教材体系論が生まれる歴史的(教材史的)な先後関係を考えてみると、若干の例外は認められるものの原則的にはこの番号順に教材体系論が展開してきたと考えてよいであろう。とすると、A. シュピースから K. ガウルホーファーの教材体系論に転換していくためには、2. のステップがあったことに注目しなくてはならない。

H. グロル²⁵⁾によれば、K. ガウルホーファーの教材体系論に影響を与えたものは、当時の自然科学的研究の成果(主として、生物学や生理学)と改革教育学(主に、ケルシェンシュタイナー)であるとし、直接的には、F. A. シュミットと F. エッカルトの教材体系ならびにプロイセンの指導計画(1913)であるという。しかし、K. ガウルホーファー自身の「比較教材体系学」¹⁶⁾のなかではスウェーデン体育に対する関心の高さとアメリカの C. W. ヘザリントンの教材体系に対する詳細な分析が印象的である。1920年代の前半には、ツルン・フェライン派の人びとから自然体育はスウェーデン体育の模倣にすぎないという強烈な批判を浴びた事実¹⁹⁾をも考え合わせ、もう一度その影響関係を具体的に確認する必要があるだろう。ここでは、K. ガウルホーファーの教材体系を祖上にのせ、これまで誰も試みることのなかったこれらの教材体系の逐条的分析を試みながら、本題である教材体系成立の影響関係を検討していくことにしよう。

2 K. ガウルホーファーの教材体系の構成

さて、K. ガウルホーファーの教材体系はさきに一覧を掲げたように、四つの大きな運動群から成り立っている。すなわち、補償運動、形成運動、達成運動、巧技の四つで、これらは教師の教育意図によって立てられた、学校体育に不可欠の領域と考えられている。かれの見解¹⁵⁾によれば、かれ以前の教材体系はいずれも単一の原理で構成されてきたところに大きな限界や矛盾があった。したがって、運動教材を選別し、分類・整理していくには複眼的な規準（原理）が必要であり、それらを全体的に統括する視点は教師の教育意図でなければならない、という。したがって、かれが当面の批判の対象²³⁾としたA. シュピースの運動分類はもとより、最も尊敬し、最も大きな影響を受けたと考えられるF. A. シュミットの運動分類も、運動の生理学的効果性という単一原理のみで学校体育全体の教材体系を統合することは誤りであるとする。この点に関して、K. ガウルホーファーの教材体系は、まず教育意図に基づく四つの分類視点を前面に押し出し（大分類）、つぎの段階で運動の類縁性による分類をした上で（中分類）、さらに運動種目からスポーツ的行為（Handlung）^{注11)}や活動（Tätigkeit）へと細分されている（小分類）。いわば、人間学（教育学）と機能運動学（のちの運動学）とを組み合わせた複眼的な視点が必要ということになる。すなわち、人間の発育・発達を助長、促進する身体運動の把握の仕方は、同時に人間をどのように理解し、把握するかという問題と同一レベルで考えられることになり、K. ガウルホーファーの主張する「人間学的な」（あるいは「生物学的な」）広い視野に立つ教材体系論が学校体育の場には必要である、ということになる。さらに、K. ガウルホーファーの人間理解については、基本的には「自然存在」（Naturwesen）としてのトータルな、あるいはきわめて「生物学」的な把握の仕方がベースにあって、それだけに教育の場では「全人」（Der Ganzmensch）にむけての形成努力が必要となってくる²³⁾。この点に限定して言えば、K. ガウルホーファーの人間理解の仕方は、一面では生物学者としてのかれ独自の立場がうかがわれると同時に、他面では当時の改革教育学（新教育運動：

Neue Erziehungsbewegung）からの影響が大きかったように思われる^{注9)}。

こうした人間理解の仕方がK. ガウルホーファーの教材体系論の基盤になっていることを確認してみると、かれの教材体系の独自性がいっそう明確になってくる。すなわち、かれの言う「自然存在」としての人間である（となる）ことを保証するために学校体育が担うべき領域が補償、形成、達成、巧技の四領域ということである。見方を変えれば、補償運動によってまず肉体上の欠陥を矯正し、健全な肉体をまず確保した上で、さらにより積極的に運動のできる肉体に鍛え上げていくことを目指し、形成運動によって姿勢と運動を形成し、より積極的に健康を維持していくための基本である姿勢を身につけ、日常運動と作業運動の合理的な方法を身につけることによって生活人としての基本問題を解決し、達成運動によっていわゆるスポーツ運動における個々人の達成能力を最大限に発揮させ、達成の喜びを体験させたり、運動習熟を獲得しながら、スポーツの継承・発展を目指し、巧技によって運動の美しさや巧みさに対して人間の持っている運動衝動を充足させ（軽業的な体操運動やダンス特有の美しさや表現欲求の充足）、「自然存在」としての人間に近づけようというわけである。さらにこれらを別の視点から整理してみると、補償運動と形成運動は健康の保持・増進と生活という人間が生きるための基本要件に対応しており、運動の必要性に支えられた領域と考えることができ、一方、達成運動と巧技はスポーツ、体操、ダンスといった運動文化に対応しており、人間の運動欲求に支えられた領域と考えることができる。あるいはまた、補償運動と形成運動によって獲得されたものをベースにして、はじめて達成運動と巧技への発展・展開が可能となる、いわゆる層構造的にK. ガウルホーファーの教材体系を理解することもできる。もっと単純に考えれば、各四つの運動群がそれぞれ、からだ、姿勢と運動（日常運動と作業運動）、スポーツ、体操とダンスに対応しており、これらが全人形成に向けて取り組むべき学校体育の学習内容を提示しているものだと考えることもできる。

3 K. ガウルホーファーの教材体系に影響を

及ぼした体育・スポーツの諸思潮

ところで、このようなK. ガウルホーファーの教材体系の構想はどのようにして可能となったのであろうか。つまり、K. ガウルホーファーの教材体系に影響を及ぼしたと考えられる前時代、もしくは同時代の体育の諸思潮（関連諸科学を含む）とはどのようなものであったのだろうか。

ごく一般的には、青年運動 (Jugendbewegung)、スポーツ促進運動 (Sportbewegung)、遊戯奨励運動 (Spielbewegung)、北欧体操運動 (Nordische Gymnastikbewegung)、新体操運動 (Neue Gymnastikbewegung)、ドイツ体操運動 (Deutsche Turnbewegung) などの成果が自然体育のなかに統合されていったと考えられている。しかも、それらを可能としたものが新教育運動の成果であり¹⁰⁾、さらにそれらの底流には「生の哲学」 (Lebensphilosophie)³⁾ があったと考えられている。ここでは、これらの1つひとつにコメントをしている余裕はないので、ストレートにK. ガウルホーファーの教材体系との接点に焦点を当てていくことにしよう。

青年運動からは、その活動の中核となっていたヴァンデルンを引き継ぎ、達成運動の第1番目に位置づけている。達成運動のなかでなされている小分類(A. ヴァンデルンからF. 基本運動まで)は、運動教材の持つ陶冶価値による序列に基づいているので、ヴァンデルンは達成運動のなかでもっとも陶冶価値の高い運動教材であるということになる。事実、K. ガウルホーファーは学校体育のなかで占めるヴァンデルンの陶冶価値について繰り返し強調している^{15), 16), 23)}。その根拠としては、「活動」 (Tätigkeit) がきわめて多面的であることを指摘する。かれの言う活動は機能 (Funktion) と同義に解することができ、ヴァンデルンという行為 (Handlung)¹¹⁾そのものが、単に身体的活動が多面的であるばかりでなく、それに附随する活動として、知的にも、精神的にも、情緒的にも、社会的にもきわめて多面的であり、全人形成を目指す一教科としての体育にあってはもっとも陶冶価値の高い運動教材である、というように評価している。しかも、学校体育の中心教材は達成運動であると考えられているので、逆に言えば、

ヴァンデルンで秀れた能力を発揮する人間は学校体育の目指す理想的人間像として浮かび上がってくる。いずれにせよ、K. ガウルホーファーが青年運動のなかで展開されたヴァンデルンの持つ陶冶価値を高く評価し、学校体育の運動教材の中心にこれを据えたことに注目しておきたい。

スポーツ促進運動および遊戯奨励運動からは達成運動の全運動教材を引き継いできている、と考えてよいだろう。ドイツ、オーストリアにあっては、少々複雑な事情があって、遊戯奨励運動の方が学校体育とより密接な関係を保ちながら達成運動のなかにセットされた運動教材に影響を及ぼしてきた、と考える方が適切であろう。この両者はその主張も活動内容も異なるけれども、K. ガウルホーファーの教材体系に限定してみた場合には一緒に考えて差しつかえないであろう。ここでとくに指摘しておきたい歴史的関心事はつぎの点である。つまり、19世紀後半から20世紀初期にかけてのスポーツ状況というものは一種の特異現象とも呼ぶべき性質のものであって、いわゆる近代スポーツの急激な組織化、国際化現象が進展したことを念頭に置かねばならないこと、A. シュピースの時代には考えられなかった新しい運動文化財が急増し、しかもK. ガウルホーファーの時代には急速に普及していたこと、とりわけ、球技に関しては「ボール革命」(1880年代と推定される)にともなう大衆化現象が起ったこと、などである。こうした状況の変化とともに、スポーツをとおして勝敗を競ったり、記録を短縮したり、技や美しさを競ったりすることの教育的意義が正当に評価されるようになり、達成能力 (Leistung) の育成や巧技における運動欲求の充足が学校体育のなかで真正面から取り組むべき課題として登場することになった。

このようにして、スポーツ促進運動と遊戯奨励運動の成果は達成運動の全領域に継承され、かれの教材体系の中核を形成することとなった。

北欧体操運動からは補償運動に相当する運動教材をそっくり引き継いだ、と言ってよいであろう。スウェーデンとデンマークを中心とする北欧体操は、その当初から解剖学や生理学に運動の科学的根拠を求めながら、次第に日常運動や作業運

動に対する補償としての体操 (Gymnastik) を構想していった^{4), 5), 67), 68)}。K. ガウルホーファーは1912年のオリンピック・ストックホルム大会の折に取材を兼ねてスウェーデンを訪れ¹²⁾、直接スウェーデン体操を見聞して強い印象を持ったようである。ちょうどこの時期はオーストリア体育会議 (1910) の成果⁸⁾をふまえて、シュピッツィーリットシャウエル改革案 (1913) が構想されていた時期でもあり、シュピース体育から脱皮しようという気運の盛り上がっていた時期でもある。オーストリア体育会議報告書にも明らかなように³⁴⁾、この時点でのスウェーデン体育に対する評価はきわめて高く、体操の上演形態による科学的根拠の理解のしやすさと構成の新しさが注目を集めていたようである。しかし、K. ガウルホーファーは、「肉体労働が身体を阻害するものである」という仮定を一般化したことは北欧体操の誤りである¹⁶⁾と一定の批判を加えながら、さらに「補償運動は身体的に正しい運動ができるようにするために局所的な身体の障害を除去する上で役に立つ。P. H. リングやかれの弟子達によってそのために考え出された活動の諸原則は一般的に正しい。しかし、姿勢や運動器官の機能的、生物学的関連についての今日の知識からすれば、該当する身体部位が機能的な意味で多面的に適合する運動 (Tätigkeit) が優先されるべきであって、合理的に操作し、頭の中で「構成」された伝統的な図式的分割運動はできるだけ差し控えなければならない¹⁶⁾」として、運動の要素化や構成化に対してはそれを排除しようとしている。いずれにしても、北欧体操の長年にわたる成果の蓄積ともいえるべき補償運動の考え方はK. ガウルホーファーの教材体系の四本柱の一本として重要な地位を占めているわけである。

新体操運動の成果は巧技のなかのダンス的巧技のなかに引き継がれている。ことわるまでもなく、ダンス的巧技のなかに含まれているフィギュア・スケートや氷上ダンスなどは新体操運動とは無関係である。ひとくちに新体操運動とは言っても、その主張の違いは種々様々である。それらを整理してみると2つの大きな系譜が考えられる。1つは音楽的発想に基づく体操の主張であ

り、もう1つは舞踊的発想に基づく体操の主張である。前者は音楽教育のなかのリズム感覚を育成するための手段として体操を活用することからはじまり、やがてリズム体操 (Rhythmische Gymnastik) や表現体操 (Ausdrucksgymnastik)²⁾ のような、体操のなかに独自の領域を切り開く功績を残している。後者は、古典バレエ打破を標榜しながらいわゆる「舞踊革命」を展開したモダン・ダンスの主張のなかから生まれたものである^{26), 36)}。かれらは人間の「内なるもの」(情動、思想など) を身体の動きで表現するためには、それに耐えうる身体の育成と基本的な表現動作の訓練が必要であると考え、そこからかれら独自の体操 (Gymnastik と Tanz の中間領域と考えるのが適切であるように思われる) を創案することとなった。

こうした新体操運動の成果がストレートにK. ガウルホーファーの教材体系に引き継がれたわけではない。あとでも触れることになるが、K. ガウルホーファーの教材体系を支える運動の基本単位は「活動」(Tätigkeit=Funktion) であるので、「活動」をさらに要素化したり、あるいは要素化された運動を再構成することによって生まれるいわゆる「体操」はK. ガウルホーファーの教材体系からははずされている。したがって、新体操運動の成果と考えられるリズム、表現、身体育成、表現動作の訓練、あるいはその他の運動の諸原則などは、部分的に補償運動や形成運動を正当化する理論的根拠とはなり得ても運動教材としての分類の対象にはなり得なかったのである。それらはむしろ、運動形成 (Bewegungsformung) などの指導法の分野に大きな貢献をしたと考えるべきであろう。

いずれにしても、K. ガウルホーファーの教材体系中のダンス的巧技の大部分が新体操運動の成果によるものであること、とくに、ダンスを学校体育の教材体系のなかに位置づけさせるだけの実績を積んでいたことに注目しておきたい。

さいごにドイツ体操運動との関係を考えてみたい。結論から言えば、巧技の軽業的巧技のうちの、いわゆる器械体操 (Geräteturnen) およびそれに関連する巧技はドイツ体操の長年にわたる成

果を引き継いだものと考えてよいであろう。K. ガウルホーファー自身も幼時からツルン・フェラインで活動しており、秀れたツルナーとしての実績も残している²⁹⁾。かれは自らのフェライン活動をとおして、ここで行なわれる運動の功罪については早くから批判の眼を養っていた。とりわけ、シュピース体育への徹底した批判はかれ自身のツルン・フェライン活動の体験から出発し、のちに理論武装されたものであることを見逃すことはできない。こうした事情を経たのちに、かれの教材体系の巧技のなかにドイツ体操の成果を引き継いでいる点は注目してよいであろう。

一方、ドイツ体操の内容についても、その受け止め方にはいろいろ問題のあるところであるが、19世紀末から20世紀初期に実施されたドイツ体操祭 (Deutsche Turnfest) の内容をみる限りでは^{9), 12), 13), 14), 24), 34), 37), 69)}、いわゆるシュピース的な徒手運動や秩序運動だけを意味するのではなく、走・跳・投を中心とした陸上運動 (Volks-tümliche Übungen) をはじめじつに多くのスポーツ種目も行なわれているのである。その意味では、ドイツ体操運動からの成果を巧技にだけ限定するのは誤まりで、達成運動にまで広げて考える必要があろう。しかし、ドイツ体操のなかで実施されていた達成運動の多くは、いわゆるシュピース的な意味での運動実施規程にしばられた不自然なものであったので、それらは同一種目とはいえ異質のものと判断すべきであろう。その点、器械運動はまさにドイツ体操のなかで生まれ⁴⁾、育まれてきたものであると同時に、運動実施規程こそが器械運動の独自性を明確にし、その存在理由となっているという点で、もっともドイツ体操的な要素が評価されたものだと考えてよいであろう。

ドイツ体操の柱とも言うべき器械体操が人間の運動欲求に対応する正当な運動教材として、学校体育の体系のなかに巧技として位置づけられたことに、ここではとくに注目しておくことにしよう。

4 「機能運動学」的発想の導入

以上、K. ガウルホーファーの教材体系に影響を及ぼしたと考えられている前時代、もしくは同

時代の体育・スポーツの諸思潮について分析を試みた。以上の分析から明らかなように、A. シュピースの時代とはまったく異なる、新しい運動文化財が豊富に開発され、しかも、それらがすでに教育の対象として継承・発展するに値するだけの根拠をも兼ね備えるだけの実績も挙げ、体育、スポーツをめぐる状況は19世紀後半から20世紀初頭にかけて激変していたことが時代・社会の大きな特色として浮かびあがってくる。したがって、学校体育の教材体系を大幅に改編することは、ある意味では時間の問題であったと考えることができるし、さらにまたK. ガウルホーファーによらなくてもよかったと考えることもできる。現に、F. A. シュミット、F. エッカルト、J. リントハルト、C. W. ヘザリントンらの教材体系、プロイセンの指導計画 (1913)、シュピッツィ=リットシヤウエルの改革案 (1913) などが続出している²⁵⁾。しかし、それらはK. ガウルホーファーの教材体系に比較した場合にはまだ前近代的な教材体系の姿をとどめていたと言わざるを得ない。ではいったいなぜ、K. ガウルホーファーの教材体系だけが同時代の教材体系と比較して突出したものとなったのであろうか。

この問題を考えるにあたって、K. ガウルホーファーの教材体系の形成運動の成立根拠を検討してみたい。指摘したように、この形成運動だけが前時代・同時代の体育思潮との影響関係が他の柱ほどには明確ではない。むしろ、直接的には何の影響関係もなかったと考える方がよいのである。しいて指摘すれば、北欧体操運動、新体操運動などに形成運動的発想が認められ、それらからの影響があったと言えないことはない¹⁵⁾。しかし、それらがK. ガウルホーファーの発想の契機にはなり得たとしても、出来あがった形成運動はまったく異質のものであったと言わねばならない。では、K. ガウルホーファーの形成運動はいかにして構想されたのであろうか。

かれの形成運動にもっとも強い影響を与えたのは整形外科医のP. ハークルトであり、H. シュピッツィであったと考えられる⁵⁴⁾。つまり、K. ガウルホーファーの形成運動をそれ以前の形成運動と区別しているものは、機能解剖学や機能

的整形外科学からヒントを得たと思われる「機能」(Funktion)の考え方である。かれは1927年の論文¹⁵⁾で初めて「機能」の概念を持ち込んで身体運動を定義づける。すなわち、「機能的順応という学説の意味で生物学的に有益な刺激となるならば、われわれは肉体のあらゆる運動を身体運動(Leibesübung)と呼ぶ」(Gaulhofer)¹⁵⁾。そして、機能の発達や改善をうながす刺激として、1 日常運動、2 労働、3 身体的遊戯、を挙げ、学校体育の取り組むべき対象を大幅に拡大した上で、教材体系の形成運動のなかに日常運動と労働(作業運動)を位置づけている。かれの考える形成運動は、良い運動形態と姿勢形態を引き出すことを意図したもので、「良い形態については、何かある規準を達成するということを考えるのではなく、運動課題や姿勢を個人のレベルで最良の方法で解決する」(Gaulhofer)¹⁵⁾ことを目指す。したがって、その解決の仕方は「課題の特性と同様に、人間の個人的な特性によって規定される。その最良の解決の仕方は力の節約である。美学も力学も形態学習の役には立たない。唯、機能的な観察方法だけが価値を持つのである。この点から、要素的な四肢運動ではなく、活動(機能的なもの)が重要なのであり、この場合にのみ形態の学習が可能となる」(Gaulhofer)¹⁵⁾。つまり、抽象的に「腕を前に挙げたり、横に挙げたりすることを学ぶ」のでもなく、「機能というものから部分運動を引き出し、分類して運動する」ことも無意味である。唯、「機能は全体として存在する」(Gaulhofer)¹⁵⁾のであり、具体的な活動(走る、登るなど)がその最小単位となる。

K. ガウルホーファーはこの機能の概念を持ち込んだことによって、要素運動(Elementare Bewegung)の無意味さはもとより、自然運動(Natürliche Bewegung)の概念のあいまいさからも脱脚し、さらに主体と環境の間に生ずる緊張関係は有意義な活動によってのみ克服されることに着目し、機能運動学(Funktionelle Bewegungslehre)への第一歩を踏み出すこととなった。つまり、機能的な運動、すなわち、活動が意味があるのであって、形成運動はまさに活動(機能)の向上のために用意された運動教材であり、その形成

運動に理論的根拠を与えたという意味で、形成運動は機能運動学の原点と呼んでよいだろう。しかも、この機能運動学的発想は、かれの教材体系全体の独自性を示す重要な基盤となっており、それまでの教材体系と一線を画すきわめて重要な視点となっていることに注目すべきである。

結 び

以上の分析・考察の結果、明らかになったことがらを整理してみると以下のとおりである。

教材体系論の発展仮説については、A. ボキータティスの三段階説が知られており、それによれば、K. ガウルホーファーの教材体系論は「理論のための実践からの教材体系論」ということになるが、H. グロルはそれに反論を加え「理論的・学問的に深められた実践のための実践からの体系論」と呼ぶべきだと提案している。このような議論をふまえながら、筆者は教材体系を支える理論的根拠として現段階までに6つの立場があることを指摘し、K. ガウルホーファーの教材体系は第3の立場である教師の教育意図による分類・体系化であることを指摘した。

K. ガウルホーファーの教材体系の構成については、生物学者としての立場と改革教育学からの影響がその基本的な前提条件となっていることを明らかにした上で、かれの教材体系には複眼的な分類視点が認められることに着目した。かれの複眼的な分類視点とは、すなわち、人間学(あるいは教育学)と機能運動学(のちの運動学)を調和的に統合し、大分類、中分類、小分類と段階的に分類することを意味し、それらは大分類から順に、教育意図、運動の類縁性、スポーツ種目、スポーツ的行為、活動、の段階をふんで細分化されていることを明らかにした。さらに、K. ガウルホーファーの教材体系の読み取り方(解釈の仕方)をいくつか提示し、その1つに補償運動=からだ、形成運動=姿勢・運動、達成運動=スポーツ、巧技=体操、ダンス、という対応関係があり、これを学校体育が取り組まなければならない学習内容のひろがりと捉えることができることを指摘した。

K. ガウルホーファーの教材体系に影響を及ぼ

した体育・スポーツの諸思潮については、それぞ
れ以下のような影響関係があることを明らかにし
た。

青年運動からは達成運動のなかのヴァンデルン
を継承し、かれの教材体系の中軸に据えたこと、
すなわち、ヴァンデルンを最も陶冶価値の高い運
動教材として評価していることから明らかなよう
に、青年運動のもたらした諸成果（フォーク・
ダンス、自然や生活と近接し、子供らしい、青少
年にふさわしい運動教材や指導法、など）からの
影響はきわめて多方面にわたっていることを明ら
かにした。

スポーツ促進運動と遊戯奨励運動からは達成運
動に密接な影響関係が認められること、とくに、
スポーツ状況については19世紀末から20世紀初期
にかけて急激な変化があったこと、しかも、短時
日のうちにスポーツ的運動教材が教育の側面から
も脚光を浴びるようになったことを指摘した。

北欧体操運動からは補償運動を一定の批判を加
えながら引き継いでおり、かれの教材体系の重要
な柱の1つとなっていることを指摘した。

新体操運動からは巧技のなかのダンス的巧技を
引き継いでおり、学校体育のなかにダンス教材を
正当に位置づけた功績は高く評価すべきことを
明らかにした。

ドイツ体操運動からは巧技の軽業的巧技、とく
に器械体操を継承し、驚異性に対する人間の運動
衝動を学校体育のなかに正当に位置づけること
になったことに注目した。

最後に、「機能運動学」的発想の導入について
は、機能的整形外科学からヒントを得たと思われ
る「機能」の概念を導入することによって、かれ
の教材体系はかれ以前のいかなる教材体系にもみ
られなかった新しい教材体系への地平を切り開く
ものになったこと、そして、かれの教材体系のな
かの形成運動がかれの「機能運動学」への出発点
となっていることを明らかにした。

注

注1) K. ガウルホーファーの教材体系に関連する
論文および著書として、以下のものを補充しておく必要
がある。引用・参考文献番号：17), 18), 19), 20),

21), 22), 23), 56), 57), 58), 59), 60), 61), 62),
63), 64), 65), 66)。

注2) Kampfspiel の訳語。これまで一般的には競
争遊戯という訳語があてられてきたが、K. ガウルホー
ファーは「きちんとしたルールを持ったチーム・ゲーム
を Kampfspiel と呼ぶ」と概念規定した上で、その代表
的な例として Schlagball, Handball, Stockball, Wasser-
ball, Stockball auf dem Eis などを挙げているので、
ここでは「球技」と訳出することにした。

注3) この発想にもとづく教材体系論はきわめて守
備範囲が広いので理解しにくい点があるかもしれない
が、近代体育の初期の素朴な分類論からはじまって、
A. シュピースのような若干の解剖学的基盤に立つ分類
論までを含むものとする。

注4) K. ガウルホーファーを匹敵とする自然体育
の系譜につながる人びとはこの立場をとる。

注5) L. メスターは身体運動を分類する視点を子
どもの心理的な行動様式に置き、自然に付与された子
どもの表現形態および行動形態として、「訓練形態」、
「競争形態」、「遊戯形態」、「ダンス形態」を指摘している。
なお、L. メスターの「訓練形態」という概念について
はK. パッセン、J. シュミッツから異論が提示され
ている。

注6) H. ベルネット、O. ハネブート、K. パッ
セン、J. シュミッツ、A. サイボルトらはこの発想
に立つものと考えてよいであろう。かれらは身体運動の
いろいろの形態のなかに含まれている陶冶の価値内容に
着目し、そこから体育における運動教材の選択と創造の
ための諸原理を導き出そうとしている。詳しくは引用・
参考文献番号：1), 45), 46), 48)。

注7) K. マイネル、F. フェッツ、R. ソボトカ
の3人を挙げることができるであろう。教材体系論もし
くは運動分類論としてはまだ仮説段階と考えるべきであ
ろうが、この方面からの今後の貢献は大いに期待してよ
いであろう。

注8) H. グロールによれば、K. ガウルホーファー
の教材体系論が生まれるまでの発展段階はつぎの四段階
になるという。1. 18世紀の医学的、生理学的直観によ
る分類・体系論(汎愛派)、2. ナショナルリズムと結びつ
いた教材体系論(L. ヤーン、ほか)、3. 主知主義的・
形式的運動教材論(A. シュピース、ほか)、4. 自然
科学的・改革教育学的新形成(F. A. シュミット、ほ
か)。しかし、体育教材史という視点から考えてみた場
合、H. グロールの時代区分には若干の問題があると考え
られるので、ここではまだ仮説段階の域を出ないけれど
も体育教材史の発展段階について著者のテーゼをあえて
提起してみた。

注9) 強い影響を受けたと考えられる教育学者は
G. ケルシェンシュタイナー、E. シュブランガー、H.

ノール, などが挙げられる。とくに, G. ケルシェンシュタイナーからの影響は大きく, K. ガウルホーファー自身, 自然体育を実現できる学校は「学習学校」(Lernschule: 古典語学習を中心とする伝統的な学校)ではなくて「労作学校」(Arbeitsschule: G. ケルシェンシュタイナーが提唱した新しい学校)である, と断言しているほどである。E. シュブランガーには引用・参考文献番号: 55) の論文があり, 自然体育の主張を文化教育学の立場から援護したものとして注目できる。H. ノールについては, K. ガウルホーファーの秀れた協力者M. シュトライヒャが1920年代の後半にいたって師事しており, 自然体育の教育学的な理論構築に大きな影響を及ぼしたものと考えることができる。

注10) 第1次世界大戦後のオーストリアの教育改革は, いわゆる新教育運動 (Neue Erziehungsbewegung) の成果を取り入れたもので, オーストリア教育改革の三原則 (1 自己活動の原則, 2 郷土化の原則, 3 合科教授の原則) に明白である。K. ガウルホーファーらの指導した「体育改革」(Turnerneuerung) もこの改革三原則をいかに体育の領域に適用するかという努力のなかで進められ, その成果の1つが, K. ガウルホーファーの教材体系として結実したわけである。

注11) かれの言う「行為」は Tätigkeit の複合体のことで, 一定の方向に進展していく活動の経過のことを意味する。

引用・参考文献

- 1) Bernett, H., Grundformen der Leibeserziehung, Karl-Hofmann: Stuttgart, 1975. Pp. 131.
- 2) Bode, R., Ausdrucksgymnastik, 2. Aufl., Beck: München, 1926. Pp. 56.
- 3) ボルノー (戸田春夫訳), 生の哲学, 玉川大学出版部, 1975. Pp. 267. (Bollnow, O. F., Die Lebensphilosophie, Springer Verlag, 1958).
- 4) Bukh, N., Grundgymnastik, B. G. Teubner: Leipzig, 1924. Pp. 134.
- 5) Bukh, N., Gymnastik im Bild, Gerhard Stalling Verlag: Oldenburg, 1926. o.S. (Übersetzung von Anna Sievers).
- 6) Burger, E. W. und Groll, H., Leibeserziehung, 3. Aufl., Österreichischer Bundesverlag: Wien, 1972. Pp. 346.
- 7) ブルガー・グロル (稲垣正浩訳), 体育の教授学, 不昧堂出版, 1981. Pp. 324. (Burger, E. W. und Groll, H., Leibeserziehung, 3. Aufl., Österreichischer Bundesverlag: Wien, 1972. Erster Teil: Historische und Didaktische Grundlagen der Leibeserziehung.)
- 8) Die Enquete für körperliche Erziehung im k. k. Ministerium für Kultus und Unterricht, Verlag

des k. k. Ministeriums für Kultus und Unterricht: Wien, 1910. Pp. 248.

- 9) Festschrift für das X. Deutsche Turnfest in Nürnberg, Stich: Nürnberg, 1903. Pp. 235.
- 10) Fetz, F., Beiträge zu einer Bewegungslehre der Leibesübungen, Österreichischer Bundesverlag: Wien, 1964. Pp. 276.
- 11) フェッツ (金子明友・朝岡正雄訳), 体育運動学, 不昧堂出版, 1978. Pp. 506. (Fetz, F., Bewegungslehre der Leibesübungen. Wilhelm Limpert-Verlag: Frankfurt, 1972)
- 12) Gasch, R., Jahrbuch der Turnkunst, Emil Stock: Leipzig, 1913. p. 229.
- 13) Gasch, R., Jahrbuch der Turnkunst, Emil Stock: Leipzig, 1907. Pp. 296.
- 14) Gasch, R., Volkstümliche Wettübungen. Max Hesses: Leipzig, 1906. Pp. 232.
- 15) Gaulhofer, K., „System des Schulturnens,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949. pp. 59—88.
- 16) Gaulhofer, K., System des Schulturnens, sowie weitere Schriften aus dem Nachlaß Gaulhofers, Österreichischer Bundesverlag: Wien, 1966. Pp. 356.
- 17) Gaulhofer, K., „Spiel, Turnen, Sport, Kampf, Gymnastik“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949, pp. 10—14.
- 18) Gaulhofer, K., „Die preußischen Turnlehrpläne,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949. pp. 215—26.
- 19) Gaulhofer, K., „Schwedische Gymnastik und österreichisches Schulturnen,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. I, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949. pp. 188—99.
- 20) Gaulhofer, K., „Schulturnen,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949. pp. 89—100.
- 21) Gaulhofer, K., „Bedeutung und Weg der körperlichen Erziehung in der Schule,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk: Wien, 1949. pp. 140—51.
- 22) Gaulhofer, K., „Natürliches Geräteturnen,“ in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), Natürliches

- Turnen, Bd. II, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1949. pp. 1—10.
- 23) Gaulhofer, K. und Streicher, M., Grundzüge des österreichischen Schulturnens, 4. Aufl., Wien, 1949. Pp. 152.
- 24) Groh, F., Zwölftes deutsches Turnfest, Verlag Paul Oberhardt : Leipzig, 1913. Pp. 305.
- 25) Groll, H., Die Systematiker der Leibesübungen, 3. Aufl., Österreichischer Bundesverlag : Wien, 1959. Pp. 228.
- 26) Günther, D., Einführung in die Deutsche Mensendieck-Gymnastik, Verlag Hochmeister & Thal : Leipzig, 1928. Pp. 40.
- 27) 稲垣正浩「ガウルホーファー, オーストリア自然体育の創始者, その1」体育科教育, 26—4 : 60—63. 1978.
- 28) 稲垣正浩「ガウルホーファー, オーストリア自然体育の創始者, その2」体育科教育, 26—5 : 58—60. 1978.
- 29) 稲垣正浩, 「K. ガウルホーファー, 現代学校体育の源流 : 自然体育」岸野雄三・成田十次郎・山本徳郎・稲垣正浩(編), 体育・スポーツ人物思想史, 不昧堂出版, 1979. pp. 567—616.
- 30) 稲垣正浩「体育の体系論について議論するためのテーゼ, そのI」体育の科学, 18—10 : 625—27. 1968.
- 31) 稲垣正浩「体育の体系論について議論するためのテーゼ, そのII」体育の科学, 18—11 : 685—87. 1968.
- 32) 稲垣正浩「K. ガウルホーファーの教材体系について」体育の科学, 26—7 : 512—16. 1976.
- 33) 稲垣正浩「諸外国にみる女子の運動教材—オーストリアの自然体育の場合」体育科教育, 25—2 : 27—30. 1977.
- 34) 稲垣正浩, 「自然体育の成立過程に関する研究—オーストリア体育会議報告書(1910年)の分析を中心に」岸野雄三教授退官記念論集刊行会(編), 岸野雄三教授退官記念論集体育史の探究, 1982. pp. 181—201.
- 34) Lang, E., Festzeitung : XI. Deutsches Turnfest, Kesselringsche Hofbuchhandlung : Frankfurt, 1908. Pp. 320.
- 35) Leitfaden für den Turnunterricht in den Preussischen Volksschulen, Wilhelm Hertz : Berlin, 1895. Pp. 145.
- 36) Medau, H., Rhythmische Gymnastik als tägliche Kraftquelle, Union Deutsche Verlagsgesellschaft : Stuttgart, o. J., Pp. 78.
- 37) Mehlhorn, K. F., Festbuch für das 12. Deutsche Turnfest in Leipzig, Kommissionsverlag Georg Merseburger : Leipzig, 1913. Pp. 180.
- 38) マイネル(金子明友訳), スポーツ運動学, 大修館書店, 1981. Pp. 489. (Meinel, K., Bewegungslehre—Versuch einer Theorie der sportlichen Bewegung unter pädagogischem Aspekt, Volk und Wissen Volkseigener Verlag : Berlin, 1960)
- 39) Möller, K., Das Keulenschwingen in Schule, Verein und Haus, 2. Aufl., R. Voigtländers : Leipzig, 1904. Pp. 155.
- 40) Möller, K., Zehnminuten-Turnen (Atmung und Haltung), 3. Aufl., B. G. Teubner : Leipzig, 1913. Pp. 105.
- 41) Neuendorff, E., Klinge, E. und Dapper, S., Deutsches Mädchenturnen, Wilhelm Limpert-Verlag : Dresden, o. J. Pp. 229.
- 42) Röthig, P., Sportwissenschaftliches Lexikon, 4. Aufl., Karl Hofmann : Stuttgart, 1977. Pp. 396.
- 43) Schmidt, F. A., Unser Körper, 5. Aufl., R. Voigtländers Verlag : Leipzig, 1920. Pp. 637.
- 44) Schmidt, F. A., Möller, K. und Radczwill, M., Schönheit und Gymnastik, B. G. Teubner : Leipzig, 1907. Pp. 224.
- 45) Schmitz, J., Fachdidaktische Analysen und Grundlagen, 3. Aufl., Karl Hofmann : Stuttgart, 1972. Pp. 158.
- 46) Schmitz, J., Grundstruktur des didaktischen Feldes, 2. Aufl., Karl Hofmann : Stuttgart, 1970. Pp. 202.
- 47) Schwarze, M., Deutsches Gerätturnen in den Entwicklungsjahren, 4. Aufl., Limpert-Verlag : Dresden, 1929. Pp. 259.
- 48) Seybold, A., Pädagogische Prinzipien in der Leibeserziehung, 6. Aufl., Karl Hofmann : Stuttgart, 1969. pp. 23—87.
- 49) Simon, H. O., Der Deutschen Jugend Sportbuch, B. G. Teubner : Leipzig, 1913. Pp. 168.
- 50) Spieß, A., Das Turnen in den Freübungen für beide Geschlechter, 2. Aufl., Schweighauserische Verlagsbuchhandlung : Basel, 1867. Pp. 167.
- 51) Spieß, A., Das Turnen in den Hangübungen für beide Geschlechter, 2. Aufl., Hugo Richter : Basel, 1871. Pp. 231.
- 52) Spieß, A., Das Turnen in den Stemmübungen für beide Geschlechter, 2. Aufl., Hugo Richter : Basel, 1874. Pp. 271.
- 53) Spieß, A., Das Turnen in den Gemeinübungen, in einer Lehre von den Ordnungsverhältnissen bei den Gliederungen einer Mehrzahl für beide Geschlechter, 2. Aufl., Hugo Richter : Basel, 1874. Pp. 230.
- 54) Spitzzy, H., Die körperliche Erziehung des Kindes,

2. Aufl., Julius Springer : Wien, 1926. Pp. 424.
- 55) Spranger, E., „Lehrer und Lehrerpersönlichkeit“, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V., Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1956. pp. 218—25.
- 56) Streicher, M., „Was kann das Turnen von den modernen Systemen lernen?“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. I, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1949. pp. 107—10.
- 57) Streicher, M., „Zur Frage der Ausgleichsübungen in Schulturnen“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. III, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1950. pp. 8—12.
- 58) Streicher, M., „Die Erziehung zu guter Haltung und Bewegung“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. III, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1950. pp. 18—34.
- 59) Streicher, M., „Die Bedeutung der Leistung in der Körpererziehung“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. III, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1950. pp. 66—77.
- 60) Streicher, M., „Gymnastik und Schulturnen“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 40—43.
- 61) Streicher, M., „Atmung und Schulturnen“, in Gaulhofer, K. und Streicher, M. (Eds.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 56—63.
- 62) Streicher, M., „Die Erziehung zu guter Haltung, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 56—63.
- 63) Streicher, M., „Noch einmal die Atemübungen“, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 63—67.
- 64) Streicher, M., „Zur Frage der Bewegungsformung“, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 67—72.
- 65) Streicher, M., „Die fachliche und die pädagogische Seite des Haltungsproblems“, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 87—94.
- 66) Streicher, M., „Das tänzerische Bewegungsspiel“, in Streicher, M. (Ed.), *Natürliches Turnen*, Bd. V, Verlag für Jugend und Volk : Wien, 1959. pp. 143—53.
- 67) Thulin, J. G., *Kleinkinderturnen mit Übungsschatz und Stundenbildern für das 6. bis 8. Lebensjahr*, Paul Eberhardt : Leipzig, 1925. Pp. 138. (Deutsche Ausgabe bearbeitet nach der ersten und zweiten schwedischen Auflage von Franz Lösel)
- 68) Törngren, L. M., *Lehrbuch der schwedischen Gymnastik*, 4. Aufl., Wilhelm Langguth: Esslingen, 1924. Pp. 579. (Übersetzung von G. A. Schairer)
- 69) Vogt, W. und Schmidt, K., *Festzeitung für das 10. Deutsches Turnfest zu Nürnberg 1903*, Wilhelm Tummels Buch- und Kunstdruckerei : Nürnberg, 1903. Pp. 292.